

## 芸術の理解と創造をめざす絵画学習カリキュラム作成の視点

兵庫教育大学大学院修士課程

教科・領域教育専攻 芸術系コース

西尾 正寛

「芸術を通した教育」の概念を基盤とし、専門的技術を必要としない自由な表現活動を重視する現行の美術科教育では、創造活動と同様に重要な側面である視覚芸術作品の理解という活動を表現活動と等価に重視する傾向にはない。そのような意味では、表現主義美術に基づく「芸術を通した教育」は、芸術の一面をとらえているにすぎないといえる。

エリオット・W・アイズナーは、「認知を伴わないような情動的な活動は成立しない」<sup>\*1</sup>と述べ、美術教育における芸術の理解が創造活動と同様に重要であることを示唆している。本研究では、アイズナーの理論的根拠に基づき、美術科教育の学習内容を表現的領域、批評的領域、文化的領域に分けて検討し、芸術の理解と創造を目指す絵画学習カリキュラムの作成を試みるものである。

### 1. 領域的側面からの絵画学習の検討とカリキュラム作成の視点

#### 1. 1. 表現的領域

アイズナーは視覚的美術形態の制作に関して、4つの一般的要素<sup>\*2</sup>を挙げている。第1は「材料を芸術的表現のための媒体として働くように取り扱うこと」である。材料は、その視覚的、触覚的性格により、作品の最終的な性格に大きく寄与することと、使いこなすための専門的技術を制作者に要求することという2つの特性により、表現活動の基本的な要素となる。第2は、見て取ることである。人間の創造行為は、美術と自然の両方に存在する視覚形態を個人が見て取る、すなわち視覚経験の意味を解釈し、作品に活用することによって可能になってきたのである。第3の要素は、新たな表現様式や造形文法を生み出すことによって、制作活動に用いる限られた材料のなかで、作者を満足させる形態を作り出すことである。そうした表現活動の構造を、アイズナーは芸術作品が生じうる2つの様式と、視覚的意味を表す3つの造形文法の発達によって構成している。第4の要素は、図と地の関係を始めとする美的秩序や感情表現、あるいは奥行といった形態間の関連性を持った全体性に注目しなければならないということである。

視覚形態に関する経験と技術を深めることによって、生徒は、これらの要素

を徐々に獲得し、美的に満足していく、かつ情緒的な視覚全体像の創造を可能にするのである。そのような学習活動を引き出す視点は次のとおりである。

- ① 技術的能力と知覚的能力のギャップをうめる材料や道具の扱い。
- ② 形態がその内面に持つ質的感觉をも知覚する、見て取る活動への発展。
- ③ 美術史の理解を基盤とした表現様式や造形文法のカリキュラムへの系統的  
位置付けと、自ら新しい表現様式を生み出す活動。
- ④ 画面全体の秩序を自分の作為に照らして造形処理する学習の位置付け。

#### 1. 2. 批評的領域

美術教育の学習活動では、芸術作品と呼ばれる諸形態を、生徒たちが理解し、楽しむ能力を開発することが出来、しかも、それは表現活動における視覚的感受性を高める働きも持っている。批評的領域に関して、アイズナーは、「適切な条件、手がかり、経験などの無いところではこのような（作品から美的な質を見て取る）能力が発達する見込みは、きわめて薄い」<sup>※3</sup>とし、作品の質的感觉を知覚するための判断基準に関する学習の必要性を主張している。作品の形態、作品に用いられている材料や技法、寓意的象徴的なもの、主題といった判断基準と、それらを扱った豊富な知覚経験が批評的領域の1つの要素として、学習活動に位置付けられなければならないのである。

こうして知覚された作品の質的感觉を言葉で表すことが批評的領域の2つめの要素である。批評は、言葉によって形態の質を暗示し、経験の少ない人に作品を見て取るための手がかりを与える。言葉を技巧的、詩的、暗示的に用いる活動は、視覚形態を言葉によって「表現しなおす」という意味で、ひとつの芸術活動であると言える。これらの学習活動を導く視点を以下に示す。

- ① 作品に対する一時的な是認を避け、何がどう描かれているのかということ  
を正確に作品から理解する学習。
- ② 作品を見るための手がかりとしての判断基準の効果的な学習への位置付け。
- ③ 過去の批評に学び、作品から知覚した質的感觉を言語化することを目的と  
した学習の位置付け。
- ④ 美術史において、視覚的意味が客観的な確立されている表現様式の精選と  
偏りの無い内容化。

#### 1. 3. 文化的領域

視覚芸術作品は、それらが育まれる時代の芸術的背景のなかで生まれてくる。生徒は作品を生み出す芸術的背景に関する経験を持つことで、自らの新しい表

現を生み出す手がかりを得、新しい作品に出会った場合に、以前に見た作品と比較し、それらの間にある違いや、系統性を理解する素地を得ることになる。芸術作品は、人間によって制作され、その作品が持つ視覚的意味を言葉にして伝えていくのもまた、人間である。その人間は文化のなかに生きており、文化は、直接芸術に関わる特定の人間にだけでなく、それ以前の芸術家の努力の成果を利用させてくれるのである。芸術家の作品は、伝統の枠内で制作したり、あるいはその枠を否定して、新しい様式を生み出すことによって、伝統を刷新しようとする努力の現われである。我々がそうした文化遺産としての芸術家の作品を理解するためには、それぞれの表現様式とその芸術的潮流を生み出した歴史的背景を知る必要がある。他の領域が2つとも、美的感覚を知覚する能力を高めるためにあったのに対し、文化的領域で学習する目的は、高められた美的感覚に、社会的文化的な価値をあたえ、生徒に内面化するためにあるということである。以上のような学習活動を引き出す視点を示すとは、次の様になる。

- ① 美術作品が制作された時代および場所の特徴、社会的慣習および社会的通念それらが作品の形式や内容に与えた影響を理解させる。
- ② 表現領域や批評領域の学習活動の際に、それらを支える学習内容としてカリキュラムに位置付ける。

## 2. 美術科教育カリキュラムの構造

カリキュラムは、学習活動がそれによってどのような教育効果がもたらされるのか、ということに考慮しながら系統的に作成される。したがって、目標、教材、指導、評価、といったカリキュラムの構成要素が効果的に機能するように計画されなければならない。

### 2. 1. 美術科教育カリキュラムの構造化における留意点

美術の表現活動に必要な技術的能力を示す指導目標は目的意識を持ってカリキュラム作成を行なううえで重要な意味を持っている。しかし、それは学習活動の結果のひとつのタイプであるが、美術科の授業において、生徒が、何を学習し、経験し、生み出したかという学習成果は、制作された後で初めて見きわめられるものであり、それらも教師が評価すべき重要な対象である。カリキュラム作成者は、アイデアやイメージ、感情の幅を拡げたり、追求したりする、というある意味で予想困難な活動を意図的に助ける意味で、表現活動や鑑賞活動の結果として得られる質的感覚や感受性の高まりを補助的に示す表現目標の概念を指導目標とともに持たなければならないのである。＊4

教材や指導では、継続性と順序性に考慮することが必要である。豊かな表現を生み出す技能の発達、改善、内面化をはかる学習活動は、それぞれの教材に関してある程度、継続的な経験の積み重ねが必要である。また、生徒が以前に獲得した技能のうえに次の学習が組み立てられるという意味で、学習の配列に考慮しなければならない。

最後に評価に関してであるが、アイスナーは、ダニエル・スタッフエルビームの評価モデルを扱い、コンテクスト評価、インプット評価、プロセス評価、プロダクト評価という循環性を持って機能する評価を行なうことにより、学習成果はもちろんのこと、生徒を目標に導く手段を評価することが可能になり、カリキュラムの有効性を高めることが出来るとしている。<sup>＊5</sup>

## 2. 2. 芸術の理解と創造をめざす絵画学習領域のカリキュラム構造

実際の学習活動を設定するにおいて、美術科教育カリキュラムは、3つの領域をもとに、大きく2つのタイプに分けることが出来る。<sup>＊6</sup>

### ① 表現中心のカリキュラム

生徒たちは、対象を素直に表現するためによく見ることや、個性的な作品づくりのために、想像力を働かせたり工夫をこらすことが奨励される。このような学習活動では、技術は表現のためにあらかじめ身につけたり、表現の具体化のために後のほうで用いられるような独立した行為としてよりも、作品を作る過程で総合的に開発される。表現活動を効果的に進めるためには、その過程で生徒たちの作品のピン트가ずれないように、主題が教師によって明確な形で表されたり、話し合われたりすることが必要である。そのような言語による活動は批評的領域や文化的領域によって支援される。

### ② 芸術関連学習中心のカリキュラム

批評や討議、読書などの形式での学習活動が、主題を取り扱う生徒たちの助けとなるために開発される。そのように学習活動を通して、生徒たちは個人的、社会的事象として美術をより深く理解し鑑賞することが望まれる。

言語によって再表現された質的感覚を表現活動にフィードバックし、追体験することで、専門的な思考を持つ生徒以外のより多くの生徒たちにも、学習成果を高めることが出来るであろう。このような方法で表現領域は芸術関連中心の学習を支援するのである。

### ③ カリキュラムの学習成果に関する留意点

学習活動を精選するにあたって考慮しなければならないのは、計画中の学習

活動の対外的な価値を決定しなければならないということである。学習活動で得られる成果が、生徒にとって単なる感情のはけ口でしかないとすれば、その学習は意味を持たないものとなる。芸術の理解によって、自分たちの創造活動の対外的な価値を認識し、偉大なる芸術家と呼ばれる人間が社会から受けた影響、そして社会に与えた影響、われわれが彼らから無意識のうちに授かっている恩恵などを知ることによって、生徒の学習は人間の歴史のなかに位置付けられるようになる。美術科教育を構成する3つの学習領域を、2つのカリキュラムにおいて効果的に扱うことによって、生徒に学習活動の価値の転移を発見させるのである。

### 3. 芸術の理解と創造をめざすカリキュラム作成

#### 3. 1. カリキュラム作成の手順

##### ① 単元の構成

「芸術の理解と創造」という目標を達成するための単元モデルとして、主題性と視覚性の表現の変遷を表す美術史的基盤に裏付けられた6つの単元と、描画材や基底材、版画といった絵画制作の表現メディアに関するふたつの単元によって成立する。

単元 1	形態描写と遠近感	単元 5	抽象絵画の理解と創造
単元 2	主題性認識	単元 6	現代の美術と芸術性
単元 3	視覚性の意識化	単元 7	版画の技法と表現
単元 4	表現の個別化	単元 8	絵画制作の材料・技法

美術史的基盤に裏付けられた6つの単元の順序性は、写実願望に始まって、次第に単なる模倣では表現を充たすことが出来なくなるという芸術的な展開を持ったものであり、表現メディアに関する2つの単元は、描画の視覚性や主題性といった問題を、版画や彫刻的な概念というメディアの変化による視覚的質の表現や、美術史上見られた画家の交流、社会的役割などを通して、美術の機能をより豊かにする内容を持つものである。

##### ② 単元の内容作成

それぞれの単元は、単元ごとの目標を持ち、表現中心の学習と芸術関連中心の学習によって構成される。実際の絵画表現活動を扱う表現中心の学習と、作品や作家を対象として、単元の目標を具体的に理解するための批評的な内容を持つ芸術関連学習は、それぞれの表現や作品、作家を生み出した文化的社会的背景を内容とする文化的領域による美術史的コンテクストを得て内容が決定さ

れる。

### ③ 単元を構成する題材の作成

各単元の目標はその内容に従い、学習プログラムとして具体化される。表現中心の学習プログラムと、芸術関連中心の学習プログラムは、単元が目標とする能力を生徒が身につけるために内容が決定された題材によって構成される。

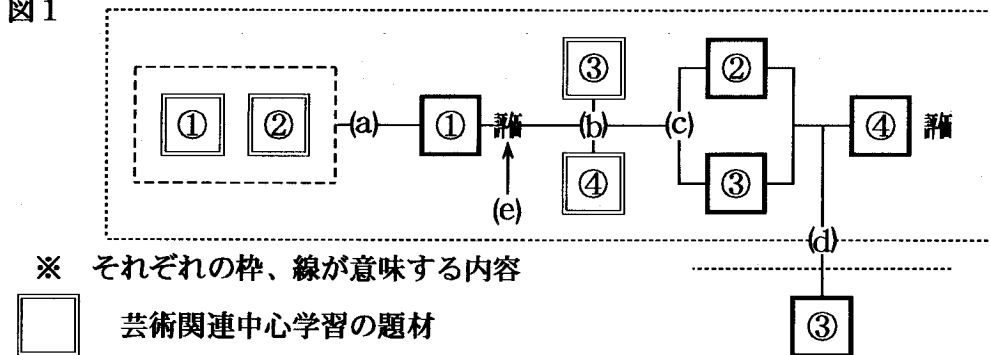
実際の運用を考慮し、導入から学習成果に至る過程の評価をシミュレートし、題材の適性を高めておく必要がある。

### ④ 単元内の題材の時系列化

カリキュラムにおいて、ひとつひとつの題材をその内容の芸術性の段階や生徒の学習性に基づく文脈に沿って示される順序性を示すものである。単元内での題材が時系列に示されることによって、カリキュラムは構成上のそれぞれの題材の結びつきや展開、題材間の選択といった留意点を含めた明確な形となる。

ここで、題材の単元ごとの時系列化と3学年を通した単元、題材の時系列化の構造図における文脈の示し方を図1に例示する。\*7

図1



※ それぞれの枠、線が意味する内容



芸術関連中心学習の題材



表現中心学習の題材。



枠内の題材を並行して同時に扱う。



題材によって構成される単元のまとまりを示す。

※※ ———線のつながりが意味する内容

(a) 前後の題材の必修的展開。

(b) ふたつの題材が内容的に強い関連を持っており、並行して扱う。

(c) 複数の題材の選択を示し、生徒によってなされるように配慮する。

(d) ユニット間の関連を示し、表現の置き換えや別ユニットの視点による学習内容の充実を図る。

(e) ユニット進行上でプロセスあるいはプロダクト評価が行なわれるべき時点。

### 3. 2. 学習プログラムの作成の視点とプログラムの凡例

各単元の内容となる題材を具体的に作成するための視点を、単元の目標と芸術性を理解するための生徒の適応性や現状の問題点をもとに、芸術の理解と創造をめざす美術科教育を構成する、表現領域、批評的領域、文化的領域の各領域から明らかにする。次に、単元が持つ内容視点に基づき、扱う題材を具体化し、題材の学習プログラムの凡例を単元ごとに時系列化した図で表し、プログラムを構成する題材の具体的な学習内容を表現中心学習と芸術関連中心学習に分けて示す。題材設定の観点は、次に示すとおりである。

- ・ 表現学習の具体的活動を表す題材名
- ・ 表現活動によって得られる作品を表す題材名
- ・ 芸術関連学習で中心的に扱う芸術作品や画家を表す題材名
- ・ 芸術関連学習で扱う美術史上の表現様式や流派の芸術性を表す題材名
- ・ 以上の内容を組合せて表す題材名

主題材名で示されるものがほとんどだが、必要な場合は副題材名によって内容が補足される。

カリキュラムの作成のうえで実際の運用に関連して考慮しなければならないのが、時間の問題である。授業時間は学習内容を拘束するのではなく、精選された学習内容が必要な時間数を決定する。しかしながら公教育という時間的に有限の環境で効果的な学習活動を行なうためには、学習の量ではなく、質を高めなくてはならないことも事実である。ここでは、単元4を例にして、学習環境や生徒の学習性や適応性などの要素によって、柔軟な題材の取り扱いができるような構造を考慮し、題材の選択性に幅を持たせたプログラムを示す。

(3学年を通したカリキュラムは、最後の図2に示した)

#### 単元 4 表現の個別化

**指導目標** 後期印象派に見られる作品や作家に関する学習を通して、それぞれの表現様式を理解し、自分の作品制作に生かす。

**表現目標** 多様化するそれぞれの表現様式が持つ芸術的意義を理解するとともに、自分にあった表現様式を選択し、感覚的な理解をもとに自分

の表現様式に発展させる。

#### 表現領域

後期印象派、象徴主義、表現主義、キュビズム、フォービズムの表現様式を模写や追体験によって理解し、版画や切り紙絵などの置き換えや基底材の工夫によって、様々な表現様式を経験する。

#### 批評的領域

後期印象派、象徴主義、表現主義、キュビズム、フォービズムに見られる代表的な表現様式の構造や視覚的意味を理解できるように点・線・面や形態といった、造形要素にしたがって構成する。

#### 単元の美術史的な背景

- ・視覚体験と制作行為を一致させる試みと画家の独創性
- ・視覚性と主題性の一致

- ・個の芸術観に基づく表現様式の多様化
- ・装飾性による平面が持つ可能性の拡大

#### 文化的領域

洗濯船での画家同志の交流や西洋における浮世絵の流行、ピカソが目にしたアフリカ美術、ゴッホとゴーギャンの共同生活など数あるエピソードを取り上げ、個々の芸術観が接触し、新しい芸術観を生み出した文化的状況を理解するとともに、その様式と共通の要素を持つ作品を生んだ東洋との文化的共通点や相違点を探る。

#### 生徒の適応性と現状の問題点

- ・生活体験における芸術体験の不足
- ・材料と表現の関わりへの認識の必要性

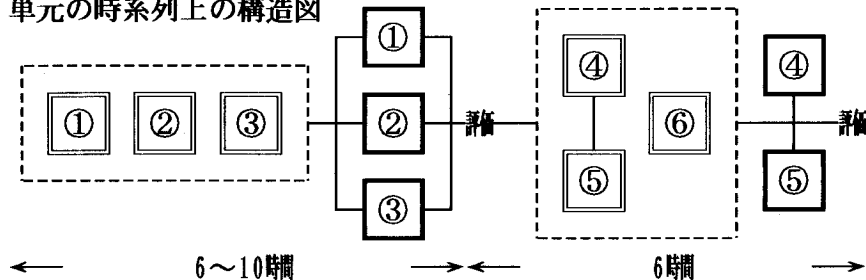
- ・表現様式や造形文法に関する学習の必要性

#### 表現中心学習カリキュラム

#### 芸術関連中心学習カリキュラム

### 題材の学習プログラム

#### 単元の時系列上の構造図



#### 表現中心学習プログラム

題材 ① 内 容	『点描による表現』 印象派のモチーフのとらえ方を参考に教室の外で、光のとらえ方に注意して対象と見る場所を選び、点描の色の使い方とタッチによって制作する。
題材 ② 内 容	『タッチがイメージを表す作品』 運動している人や働いている人をモチーフに、その動きを、筆のタッチで表現して描く。 強弱や濃淡を持った様々な線を描いてみてそれらが表す印象について考える。腕の動き方で現われる線の勢いや整れが、それ独特の印象を表すことを理解し表現に生かす。



題材 ③ 内 容	<p>『色と形を単純化して描く作品』 人物と植物をモチーフに、形態や色彩を単純化した表現の作品を作る。 細かい部分を省略した人物スケッチと文様の単純化した植物の葉や花を用いた背景を組合せる。人物は色味を3～4段階に整理して平面的に塗り、背景は人物の印象にあった色で画面全体の装飾性を高めることに注意しながら塗る。色紙を使った切り紙絵で作ることも良い。</p>
題材 ④ 内 容	<p>『キュビズムお面の絵』キュビズムの理解 画用紙を使い、いろいろな大きさの底面の無い円盤や円柱を準備する。それを材料に友達同士で顔を見ながらお互いの顔のお面を作り、出来たお面をスケッチする。白、黒だけ、あるいはそれにひとつだけ色味を加えた色を使って明暗をつけ、ピカソのキュビズムの作品と見比べる。</p>
題材 ⑤ 内 容	<p>『感情を形態に』デフォルメの表現 自分が何か大きな感情に震われたらどのような表情やポーズをするか考え、それが表現されるような描き方を考える。喜怒哀楽など感情を表すいろいろな条件を設定してみて、その時の自分の顔とポーズを大げさに表現してみる。</p>

### 芸術関連学習プログラム

題材 ① 内 容	<p>《色の点によって描かれた絵》 ルノアール、モネ、スーラ、シニャックの作品を見て、戸外で見る鮮やかな光を表現するために考えだされた色彩分割の考え方と点の集まりによる表現様式を理解する。</p>
題材 ② 内 容	<p>《筆の動きが作品に与える影響》後期印象派と水墨画 ゴッホ、プラマンクの作品に見られる感情的な筆の動きを描く対象や作品の主題と関連させて見たり、水墨画に描かれている山水を表す形態に素直な筆のタッチを見て、筆の動きが表現のなかで果たす役割の重要性を理解する。</p>
題材 ③ 内 容	<p>《平面的な色彩の作品》フォービズムと日本画 プラマンクやマチス、ルオーの作品を見て、その色の使われ方に注目し、色彩の表現そのものが制作にもたらす影響と色彩表現のために装飾的に形態を単純化させた作品を通して、絵画が個人の芸術観に基づく一箇の存在として独立してきた様子を理解する。また 琳派に代表されるような日本画が持つ平面性と装飾性を比べ、室内の装飾として描かれた日本画の特性を関連させながら、平面性と装飾性が絵画のなかでどのような働きをしているのかを考える。</p>
題材 ④ 内 容	<p>《立体を平面に描くための表現》 セザンヌの形態分解の考え方をもとにキュビズムを起こすピカソやブラックの作品を見て、その理論的構造から、立体物を平面に描くために現われた絵画固有の空間づくりを理解する。</p>
題材 ⑤ 内 容	<p>《ピカソとアフリカ芸術》 アフリカの原始芸術作品を参考に、「アビニョンの娘たち」とそれが描かれるまでのピカソの作品を見比べ、どのように変化したのかを考え、それ以降のピカソのキュビズムに影響したアフリカ芸術の価値を考える。</p>
題材 ⑥ 内 容	<p>《感情を描きだした画家》 人間の生と死、愛などを印象派の影響受けながらも独自の感情表現に基づいて描きだしたムンクの作品を見て、その独特なデフォルメの効果を理解する。時にクリムトやシーレの作品と比べてみる。</p>

#### 4. 研究のまとめ

本研究で示したカリキュラムは、アイスナーの先行理論に基づいて作成した一例にすぎず、実際の学校現場で有効性を実証する必要がある。特に題材の順序性に基づく時系列化に関しては、美術史的なコンテキストにおいておおよそ可能であるが、生徒の適応性に基く学年を通した時系列化は、美術や芸術の理解や創造に関してアイスナーが挙げていた諸要素に即した調査を行ない、その結果を最大限に取り入れる必要がある。芸術の理解と創造をめざし、綿密に計画、構造化された美術科教育のカリキュラムによる学習活動は、単なる問題解決やカタルシスにとどまらない、創造的で美的な表現活動を可能にすることが考えられる。学校教育が生徒たちに果たす機能を考えれば、それは一部の才能ある生徒だけに与えられるだけでは十分ではない。技法や遊び、表現様式やイメージといったさまざまな側面からの芸術との出会い、理解、そして創造の活動は生徒たちの美的な感性を高め質的な操作の能力を育むことが可能である。リアリズム芸術や表現主義芸術に留まらない幅広い美術の芸術性の理解は、生徒たちの芸術的欲求によって中学校の教科としての美術科教育の重要性を再確認させるのである。

#### 訳 注

- \*1 Eliot W Eisner "Cognition and Curriculum, A Basis for Deciding What to Teach" 邦訳「教育課程と教育評価 個性化対応へのアプローチ」 仲瀬律久監訳 岡崎昭夫、長町充家、福本善一訳 建帛社 1990 p30
- \*2 Eliot W Eisner "Educating Artistic Vision" 邦訳「美術教育と子どもの知的発達」 仲瀬律久他訳 黎明書房 1986 p102
- \*3 Eisner 「美術教育と子どもの知的発達」 p164
- \*4 同 上 p186
- \*5 同 上 p236
- \*6 同 上 p200
- \*7 この構造図式は、ガイ・ハバド (Guy Hubbard) の編集した図工・美術教科書「アート・イン・アクション」 ("Art in Action" Coronado Publishers Inc., 1986) で採用されたストランドという樹系図に倣ったものである。

図2-1

3年間を通した時系列上の構造図

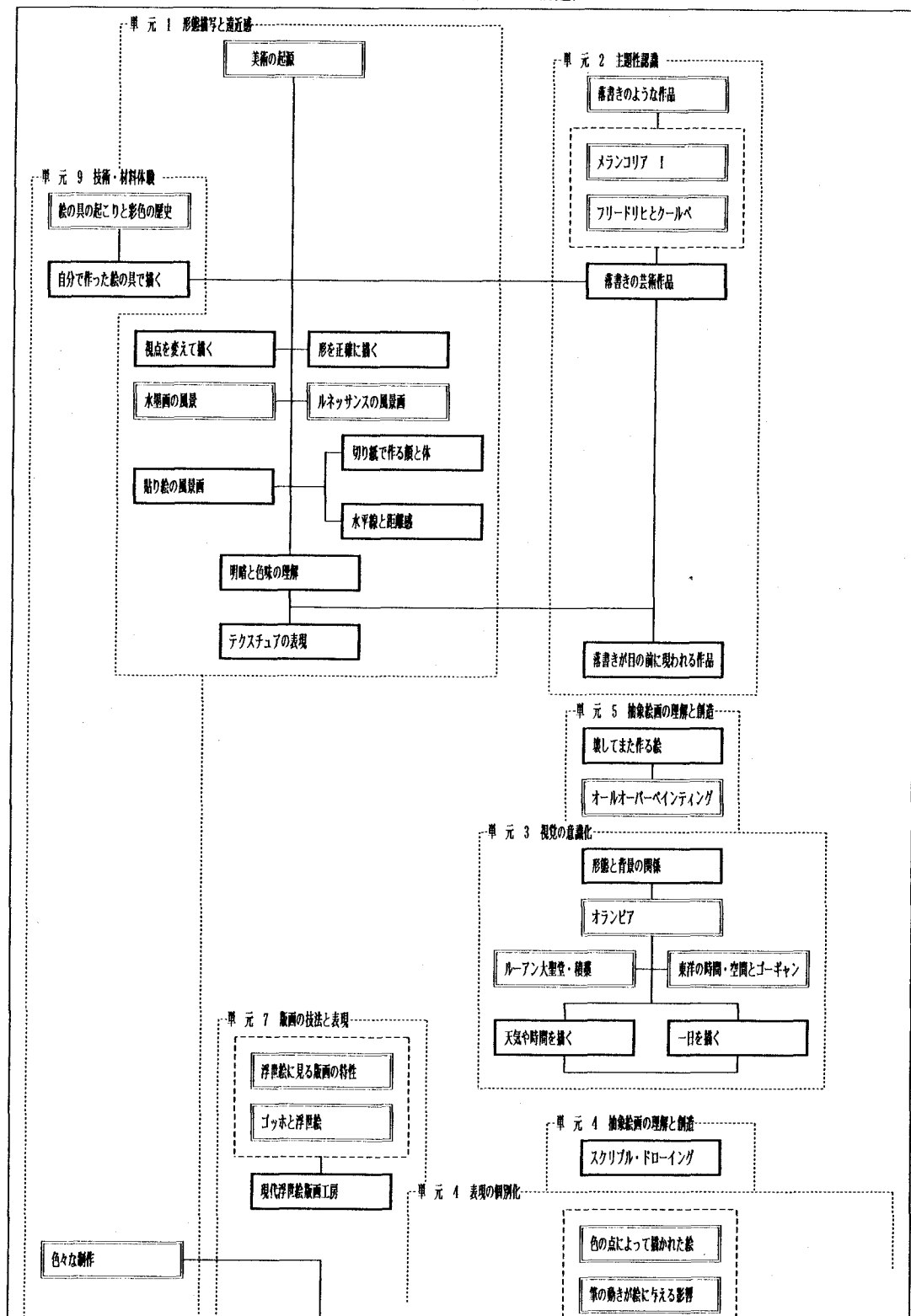


図 2 - 2

